

八千代市 梅屋敷遺跡

1 9 7 9

梅屋敷遺跡発掘調査団
日 本 住 宅 公 団

例 言

1. 本書は、千葉県八千代市大和田新田102番地に所在する遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の発掘調査に関する費用は日本住宅公団が負担した。
3. 発掘調査は、昭和53年7月22日に開始し、昭和53年8月7日に終了した。
4. 本報告書の作成は佐藤克巳が行った。原稿の執筆は各担当者名を末尾に記した。
5. 発掘調査の写真及び遺物の写真は野中勇及び佐藤が行った。遺物の拓本、実測は星忠、製図は山本和美が行った。

序 言

近年、文化財の重要性が認識され、特に埋蔵文化財の保護は市町村の重要な仕事の1つとなっています。本市においても、4～5年の間に、おおびた遺跡、村上供養塚、村上古墳群、桑橋遺跡、桑納前畑遺跡等の調査を行いました。

日本住宅公団関係でも、村上団地造成に伴う村上遺跡群、前回の高津団地の第2次造成に伴う木戸前遺跡、現在調査している萱田特定土地区画整理事業内の萱田遺跡など大規模な集落址や1万年以上昔の先土器時代の遺物も検出され、本市の文化史に貴重な1頁を加えることが出来ました。このたび高津団地第3次造成に伴い、高津梅屋敷遺跡の分布地ということで今回調査となった訳です。

この報告書が本市の歴史を知る資料の1部となれば幸いです。

最後に本報告書刊行にあたり、夏の炎天下の中で調査にあられた佐藤克巳氏をはじめ、調査員、調査協力者各位に対し、厚く感謝申し上げますと共に、その他関係各位に対し、深甚なる謝意を表する次第です。

昭和54年3月

高津梅屋敷遺跡調査会

会長 市川 浩 一

目 次

例 言

序 言 調査会長 八千代市教育長 市川 浩一

I 調査にいたるまでの経過	(1)
II 遺跡の位置	(3)
III 調査の方法および経過	(3)
IV 遺跡の状況および土層	(8)
V 結 び	(11)

挿図目次

第1図 梅屋敷遺跡付近図	(2)
第2図 梅屋敷遺跡の地形及び調査範囲図	(折込)
第3図 梅屋敷遺跡トレンチ及びグリッド配置図	(5)
第4図 梅屋敷遺跡土層層位図	(9)
第5図 梅屋敷遺跡の出土遺物	(9)

図版目次

図版1 遺跡全景 (上, 南方から北方を望む。下, 南方から東方を望む)
図版2 " (上, 南方から西北方を望む。中, 下, 調査風景)
図版3 上, 東西中央トレンチ 中, 遺跡土層 下, 実測風景
図版4 上, 001 遺構 (ピット) 下, 同土層
図版5 出土遺物

I 調査に到るまでの経過

近来、東京都全体の人口増加率は零に近い状態である。多摩地区等は極めて人口増加がはげしく、学校等の公共施設の設置が追いつかないとか警察官等の増員が都の財政問題との関連から思うように行かないとかいったことがある反面、東京中心部の人口はどんどん減っており、銀座あたりの名門小学校等では生徒数が少なすぎ、統廃合問題もおこりかねない。しかし、東京中心部を除いた首都圏の人口増加はますますはげしく、殊に千葉県の人口増加は著るしく、先般、千葉ニュータウン建設の進行する中で、北総鉄道が小室地区から新京成初富まで開通の運びとなり、いずれは東京方面へと延長されることになる。外環状線武蔵野線（小金線）も開通したばかりである。人口増加に対処するとはいいながら、逆にいえばますます人口増加をうながすともいえる。ニュータウンや鉄道の設置は必然的に埋蔵文化財発掘調査にかかわってくる。千葉県においてもここ最近毎年100件をこす発掘調査が行なわれ、調査費用も10億円をこす額となっている。

八千代市高津団地の拡張に関連して昭和50年夏に、木戸前遺跡の調査を実施したが（注）、木戸前遺跡の東方約200mばかりの台地上及び傾斜地にかけて、同じく高津団地の増設の計画がおこり、昨年2月、施工者住宅公団東京支社の鈴木氏から発掘調査を依頼された。その後、県文化課等とも連絡をとり、調査をすることにした。八千代市教育長市川浩一（調査会長）を中心に調査会を編成した。調査補助員については、八千代市社会教育課木原善和及び住宅公団を通じ、高津付近住民から集めたほか、県立印旛高等学校社会科研究会生徒諸君の協力を得た。現地にプレハブの事務所を設置し、又電話等について現地の元の土地所有者村田牧場の御一家の御好意を得た。調査会及び調査団の組織は下記の如くである。

調査会長 八千代市教育委員会教育長 市川 浩一

調査会事務局 八千代市教育委員会社会教育課 木原 善和

調査団

調査団長及び調査主任 佐藤 克巳（千葉県立国分高等学校教諭）

調査員 森 耕一（千葉県文化財調査員、白井第一中学校教諭）

” 薄井 敬（千葉県立印旛高等学校教諭）

学生調査員 星 忠(慶応大学), 野中 勇(法政大学), 山本和美(都立経済短期大学)

補助員 橋本 裕子, 林 恭子(都立経済短期大学)

大川 澄子, 宮本 文子, 紙谷 澄江, 笠井 光子, 富山 幸子,

藤山 弥生, 高城 寿子, 佐藤 明子, 吉田 裕子, 菊地 葉子

(以上印旛高社会科研究会)

染谷 浩, 伊藤 裕司(国分高生)

(佐藤)

II 遺跡の位置

本遺跡は、八千代市大和田新田102番地に所在する。遺跡は、印旛沼から東京湾へ注ぐ新川の支流が形成する谷の左岸台地舌状張り出し基部に在り、標高約27mである。高津団地北東に位置し、小さな谷(現在6m道路)をはさみ、西方同台地上には木戸前遺跡(第1図-1)が所在する。此の他、本遺跡附近には「千葉県記念物所在地図」に高津遺跡群(第1図-2~8)が記されている。また、本遺跡から東北東約3.5km離れた新川中流右岸には、村上遺跡群が存在し、左岸にも萱田遺跡の所在が確認されている。

調査範囲は、東西約100m、南北約100mの範囲である。調査範囲の東側には畑地が連なり、南側は住宅地となっている。西側から南側にかけては谷の進入で傾斜を呈す。今回の調査では、トレンチ及びグリッド併用の調査方法を採用し、最も遺構・遺物等の検出が期待されるこの傾斜地に接する台地端に重点を置いて調査を行った。発掘面積は延べ1608m²である。(星)

III 調査の方法および経過

調査方法

調査方法としては、調査範囲全体を40m×40mの基準グリッドに区分し、更に、この基準グリッドを細分して4m×4mの基本グリッドを組んだ。したがって、全体に40mごとの基準大杭と4mごとの基本小杭を打った。トレンチは南北2本、東西3本の基本トレンチを設定し、他に調査の進展とともに6本の小トレンチを追加した。トレンチの幅はいずれも2mである。また、遺構・遺物の検出が期待される遺跡の西と

南部分には、トレンチ以外に千鳥状に4m×4mのグリッドを設定した。遺跡北東部分（Jグリッド）については、トレンチ部の調査結果を考慮してグリッドを設定することにした（結局、遺物・遺溝等が検出されず調査にはいたらなかった）。その他、ブレ縄文期の遺物が検出される可能性を考え、トレンチ及びグリッド内に幅50cmのサブトレンチを設定し、ハードローム層を約20cm掘り下げた。（星）

調査経過

昭和53年7月2日（日）晴れ

調査に先だち、佐藤・星・野中・山本・山田（住宅公団）とが調査現場に赴き、下見と今後の調査に関する打ち合せ等を行なう。既に、現場では京葉測量による測量と夏草の伐採が始まっていた。土層状況を知るために数カ所で試掘も行なった。遺跡地は最近まで牧場として使用されていたことから、耕作などによる人為的なカクランは少ないものと思われる。

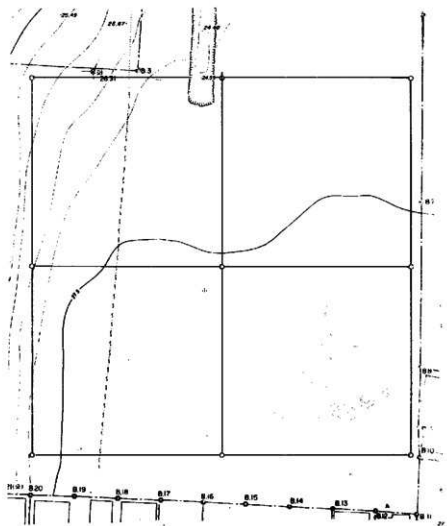
7月22日（土）晴れ

本日より調査開始。現場は夏草の伐採も完了しており、さっそくトレンチを設定し調査を開始する。トレンチは、E00～09、E09～99、E90～99、F00～09、F90～99、H00～09、H92～99、J00～09、J09～99トレンチを設定する。

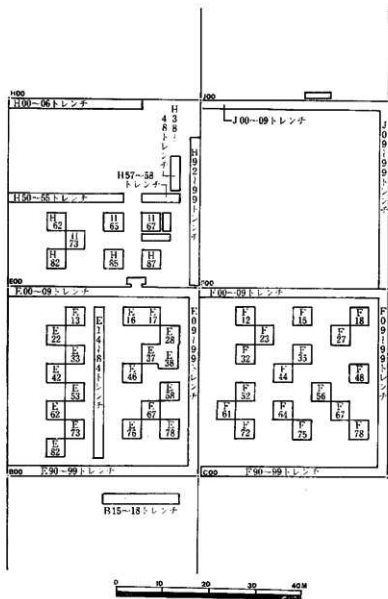
E01～09、E09～99、F09～99、H29～99トレンチは表土層掘進。H39～49、E07～08、F29～59、E06トレンチ部に、それぞれ落ち込みらしきものが認められたが明確でない。F00とJ00の基準大杭を中心に南北に基本杭を打つ。

7月23日（日）晴れ

E90～99、F09～99、H00～07トレンチ表土層掘進。E14～84トレンチ設定及び掘進。E06において落ち込みが認められるのでサブトレンチを設定し、追求調査を行なったが予想外に落ち込みは浅く、大きさも小さいため遺溝の可能性は無くなった。E90～99トレンチ表土掘進。E90～99、E00～09、H00～09トレンチに幅約1mの溝が認められたが明確でない。



第2図 遺跡地形図及び調査軸線図



第3図 トレンチ及びグリッド配置図

7月24日（月）晴れ

H38～48, H50～55, H57～58トレンチ設定及び掘進。E14～84トレンチ掘進。H92～99, E90～99トレンチは更に約10cm下げて掘進。H92～99トレンチの落ち込みはかなりカクランされており、ピット状のものが認められたがはっきりしない。Jグリッドの地表面より縄文土器片を1点採集。

7月25日（火）晴れ

E09～99, E90～99, F00～09, F90～99トレンチ掘進。E16, E28, E37, E46, E58, E67, E76, H67, H73, H85, H87グリッド設定。H73, H85, H87グリッド表土層掘進。H73グリッドで落ち込みが認められたので、ローム層上面まで掘り下げて調査したが、どうも含有遺物から察するに、最近のものらしい。

7月26日（水）晴れ

E16, E28, E37, E58, H67, H85グリッドを表土層掘進。F00～09トレンチ掘進。E37, H87グリッド表土層下部より、それぞれ土器片1点が出土。E28, E37, E38グリッドにかけて落ち込みらしきものが認められ、またH67グリッドでは住居址の周溝らしき落ち込みも認められた。H67グリッドの調査は明日行なう。

7月27日（木）晴れ

H67グリッドの周溝らしき落ち込みの確認のため、東側に2m幅のトレンチを設定して拡張調査を行なう。また、H85, H87グリッドでは約15cmハードロームを掘り下げを行なう。他方、E13, E22, E33, E42, E53, E62, E73, E82, H62, H82グリッドを設定し、E33, E62は表土層掘進。

7月28日（金）晴れ

H67グリッドの周溝の確認のため、更に南側に2m幅のトレンチを設定して、拡張追跡調査を行なったが、遺物等の検出も無く、周溝らしきものも、どうやら住居址のものでは無い。F12, F15, F18, F27, F48, F67, F78グリッド設定。F67, F78グリッド設定。F67, F78グリッド表土層掘進。E46, E58, E76, E13, E33, E42, E53, E82グリッド継続掘進。

7月29日(土) 晴れ

E13, E53, E62, E82, H62, H82グリッド継続掘進。F23, F32, F35, F44
F52, F56, F61, F64, F72, F74グリッド設定。

7月30日(日) 晴れ

E37グリッド内に認められる落ち込みの調査を行う。本グリッド内からは表土層削平の際に縄文土器片1点が検出されているので遺溝の可能性もある。また、E62グリッドでも落ち込みが確認された。E16, E22, E28, E33, E38グリッドをハードルームまで掘進。F22, F18, F27, F35, F48, F52, F61, F56グリッド表土層掘進。F48グリッド表土層より縄文土器片2点を採集。

7月31日(月) 晴れ

E37グリッド継続調査。E37グリッドの落ち込みはE38とE28に連続しているため、各グリッドを調査する。E62グリッド内で確認された落ち込みも調査するが、遺物の検出が無く、はっきりしない。E22, E42グリッドをハードルームまで掘進。

8月1日(火) 小雨 強風

台風の接近のため、作業を中止する。

8月2日(水) 晴れ 強風

E37, E38, E28グリッドにかかる001遺溝を継続調査。E78, H65グリッド, B15~18, J09~99トレンチ掘進。J06において、トレンチ内北側に落ち込みが認められたため、トレンチ北に2m幅のサブトレンチを設定して掘進する。E17グリッド表土層より縄文土器片2点採集。

8月3日(木) 晴れ, 強風

001遺溝を継続調査する。001遺溝内より縄文土器片1点採集。H65グリッドをハードルームまで掘進。今日は大変に風が強いため、主な作業は午前で終了する。

8月4日（金）曇り 強風

001遺溝の平面・断面を記し、写真撮影を行なう。E13, E33, E53, E73, E82
グリッドをハードルームまで掘進。

8月5日（土）晴れ

各トレンチ・グリッドの土層セクションを実測する。また、遺跡全体の写真撮影を行なう。

8月6日（日）晴れ

昨日に引き継ぎ、各トレンチ・グリッドの土層セクションを実測する。

8月7日（月）晴れ

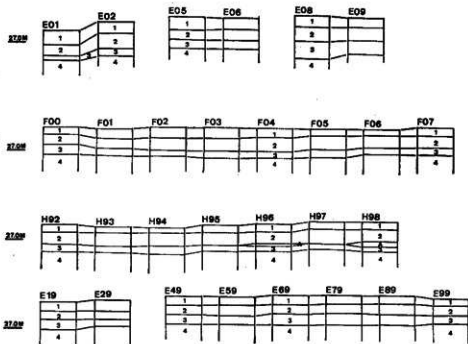
遺跡の全体的な補充調査を行ない、器材を整理し調査を終了する（山本）。

IV 遺跡の状況及び土層

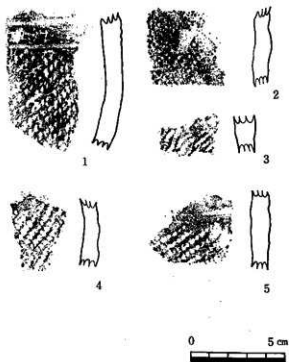
遺跡は調査前にはかなりの夏草が繁茂していたが、此の遺跡地が最近まで村田氏所有の牧草地であったために、樹木は殆んど無い状況だった。隣接する東側は畑地であり、南側は住宅地となっており、遺跡の所在する台地も、既に宅地造成の波におされ、その原形を失いつつある。調査は草刈から開始された。同時に試掘も数ヶ所で行ない土層状況を調べたが、その結果層位に大きな変化の無いことが予測された。また、牧草地あとなので牧草肥料を目的に、枯れ草等の土への還元が行なわれ、各地に穴が掘られた可能性もあり、遺跡への影響も懸念された。

土層は、ローム層（3・4）の上に褐色土層（2）約20cm～約30cmと表土層（1）約10cm～約30cmが堆積した単調な状態がみられ、わずかにH96とH98のローム混入褐色土層（A）において、層位に変化が認められる。また、E04～05, E06, H67, H73, E62, J06グリッド等で土層の落ち込みが認められたが、いずれも遺物は検出されず、層位からも最近のものと考えられる。

遺物は当遺跡から、わずかに縄文土器片9点が発見されたにすぎず、そのうち4点



第4図 土層層位図



第5図 梅屋敷遺跡の出土遺物

が無文のものである。また、遺溝においては、縄文時代のもので確定はできないが、E37～E38とE28グリッドにおける001遺溝において、長軸3.5m、短軸3.0m、深さ1.4mの不整楕円形を呈すピットが検出された。

遺物1、5は単節斜縄文と沈線文を有す。3、4は単節斜縄文を有し、2は磨滅により不明瞭だが、わずかに単節斜縄文の痕跡が認められる。遺物4は001遺溝内より検出されたもので、遺物5は001遺溝上の表土層より検出されたものである（星）。

結 び

当遺跡南方は新川の支谷の一つであるが、その谷自体がそれほど大きいものでなく、然も谷に接する部分は現在住宅が幾つか立っているところであり、当遺跡はその北奥にあたり、そのためほとんど遺構らしきものが検出されなかった理由であろう。数点の縄文土器片は現在住宅のあるあたりから耕作などで運ばれたものであろう。遺跡東側の畑地からは縄文土器片や長さ約3cm、径7～8mmの砲弾状の土鏝が表採された。

調査期間中、毎日暑い晴天の日が続き、そして遺物・遺構がほとんど検出されないことはかなり疲れを感じさせた。又、その割に調査が長引いたのは、補助員が当初予定した数の半数ほどしか集まらず、又一方においてプレをも予想して深く調査したことによる。

しかしながらわずか5点にすぎないが、縄文土器片の検出されたことにより、考古学の一資料が提供されたことになり、わずかながらこういった資料の積み重ねが、原始社会解明の手がかりとなろう。

最後に、この調査の費用を負担していただいた日本住宅公団東京支店関係者、県文化課古内茂氏等多くの方に御協力御理解をいただいたことに対し、深く感謝する次第です。

(佐藤)

☒ 版



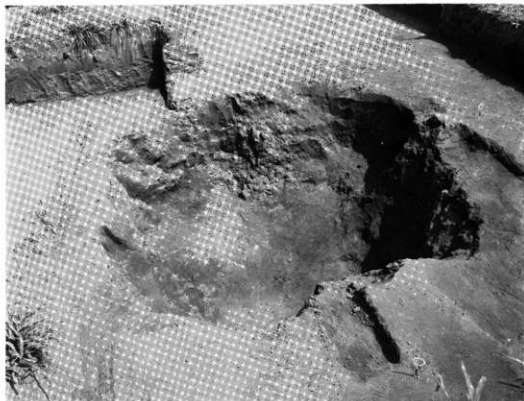
遺跡全景（上，南方から北方を望む 下，南方から東方を望む）



上，遺跡全景，南方から西北方を望む 中，下，調査風景



上, 東西中央トレンチ 中, 遺跡土層 下, 実測風景



上, 001遺構(ピット) 下, 同土層



1



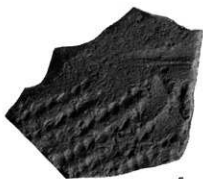
2



3



4



5

出土遺物

八千代市 梅屋敷遺跡

編 集 佐 藤 克 巳

発 行 昭和54年3月30日
梅屋敷遺跡発掘調査団
日本住宅公団東京支社

印 刷 共和写真工業株式会社
〒103 東京都中央区日本橋3-2-1
三伸ビル TEL.(03)274-2814